

<2007年野副杯準決勝 有機分析 vs 錯体 レポート>

2007年5月23日、宮城学院の向かいにある桜ヶ丘公園野球場において、我々有機分析チームと錯体チームとの野副杯準決勝が行われた。

野副杯の試合は評定河原や牛越橋で行われることが多く、桜ヶ丘公園野球場での試合は初めての経験。直射日光が降り注ぎ5月としては驚くほどの暑さで、あわてて応援メンバーがスーパーへ飲み物を買いに走るほどだった。

合同棟・放射・合有チームとの一回戦は三回に逆転されたものの四回に再逆転し終盤の追加点もあり10-4と勝利。この準決勝も勝って6年前の準優勝以来の決勝進出を果たそうと意気込む我々であった(Figure 1)。



Figure 1. 試合前、相手チームの守備練習を見て傾向を探る二人



Figure 2. 整列して試合開始

両チームの守備練習の後、審判も揃ってよいよ試合開始(Figure 2)。我々有機分析チームが先攻、錯体チームが後攻となった。

一回表有機分析チームの攻撃はトップバッターの小川君が四球を選び出塁するものの後続が倒れ得点ならず。続いて一回裏錯体チームの攻撃。こちらのピッチャーは高校で野球経験がある小川君(Figure 3)。初回を見事三者凡退にうちとる。



Figure 3. 我らがエース、小川君



Figure 4. スーパーキャッチをした森田君(打者)

錯体チームのピッチャーの投げる高めの球につい手が出てしまう我々は二回から四回まで三者凡退。しかしこちらもエラーでランナーは出すものの小川君の打たせてとるピッチングで二回、三回と0点に抑える。

そしてこの試合のハイライトとなった四回裏の錯体チームの攻撃。最初のバッターがレフトへ大きな当たりを打つ。するとレフトを守る森田君がグラブで捕球しそこねて股間にボールが直撃。悶絶しながらもボールを落とさずアウトをとった彼にみんな拍手喝采だった(Figure 4)。

その直後の五回表、まず駒野君がレフトへチーム初ヒット(Figure 5)。2アウトとなったものの法月君が四球を選び1,2塁のチャンス。ここでポストクのカナダ人、グレイアムさんに打席が回る(Figure 6)。グレイアムさんの当たりは大きかったもののライトの好守備で得点ならず。



Figure 5. 初ヒットを打った駒野君



Figure 6. 助っ人外国人のグレイアムさん

六回、七回の攻撃は粕谷君のライト前ヒット一本のみで得点できず。しかし小川君がノーヒット、無四球のピッチングで、守備のエラーでのピンチはあったものの得点を与えず七回が終わって0-0の引き分け(Figure 7)。両チームで話し合った結果エース同士でのじゃんけんで勝敗を決めることになったが負けてしまい、決勝進出はなりませんでした。最後にこの試合の数日後に東京へ行く粕谷君をみんなで胴上げしてこの試合を締めくくったのでした(Figure 8)。錯体チーム決勝がんばってください。



Figure 7. 野副杯では珍しいスコアレスドロー



Figure 8. 粕谷君、東京でもがんばって

(文責：有機分析 菅野 尚基)